

2013年3月27日 大学院脳科学研究科（快風館）公開シンポジウム開催報告

3月23日（土）同志社大学 学研都市キャンパス快風館講義室において、同志社大学大学院脳科学研究科（快風館）公開シンポジウム「アルツハイマー病の治療薬開発最前線ー タウに焦点を絞ってー」が開催されました。

木津川市またはその近隣に在住の認知症に興味のある一般市民及び医療従事者（勤務医、開業医、看護師、薬剤師、パラメディカル、ケアスタッフ等）にアルツハイマー病治療薬開発に関する科学的知識をわかりやすく解説し、これまでのアルツハイマー病治療研究の問題点と最先端の研究、今後の展望を解説しました。アルツハイマー病の原因物質はAbeta分子の凝集塊とタウタンパク質の凝集塊であるといわれていますが、これまでの市民向けシンポジウムとは異なり、Abeta分子ではなくタウタンパク分子に焦点を当て、抗タウ薬としてのアルツハイマー病治療薬の可能性を論じました。

事前申込制で、かつ平易とは言えない内容にもかかわらず、当日は84名方にご来聴いただき、会場はほとんど空席がない程の盛況となりました。熱心にメモをとる参加者も多く、講演者に対して積極的な質問等もあり、充実したシンポジウムとすることができました。

プログラム（講演者の敬称略）

●座長（司会・進行）

柳澤勝彦（独）国立長寿医療研究センター認知症先進医療開発センター長・研究所副所長）

●開会挨拶

松岡 敬（同志社大学大学院 脳科学研究科長）

●アルツハイマー病に関する予備知識

井原康夫（同志社大学大学院 脳科学研究科教授）

●講演1 「アルツハイマー病ー疫学と発症機序概説」

荒井啓行（東北大学加齢医学研究所教授）

●講演2 「脳プロジェクトDX1 開発状況」

高島明彦（独立行政法人国立長寿医療研究センター認知症先進医療開発センター部長）

●講演3 「抗タウ治療薬の可能性を探る」

宮坂知宏（同志社大学生命医科学部助教）

●講演4 「認知症治療薬開発の現状と問題点」

杉本八郎（同志社大学大学院脳科学研究科チェア・プロフェッサー教授、株式会社ファルマエイト取締役会長）

●まとめ 「同志社大学における研究と快風館の位置づけ」

井原康夫（同志社大学大学院 脳科学研究科教授）

